

## スポーツ健康科学教室との連携による教員養成課程 履修学生のリーダーシップ能力養成の試み (3)

澁川 賢一<sup>1</sup> 新保 幸洋<sup>2</sup> 湯田 秀行<sup>1</sup>

The Leadership Development Program for the Teacher-Training Course Students,  
Prepared in Collaboration with the Health and Sports Science Section  
< The Third Report >

Ken-ichi SHIBUKAWA<sup>1</sup>, Yukihiro SHINPO<sup>2</sup>, Hideyuki YUDA<sup>1</sup>

### 1. はじめに

東邦大学理学部スポーツ健康科学教室では、2014年度よりスポーツ健康科学実技Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ〔種目：マルチスポーツ〕およびスポーツ健康科学演習Ⅱ・Ⅵ〔マルチスポーツ〕（以下、MSと表記）を、教員養成課程と連携しながら開講している。この科目はスポーツの指導実践を行う模擬授業を通して学生のリーダーシップ能力を涵養することを狙いとしている。第1報<sup>1)</sup>では受講学生の授業評価レポートとレポート課題のデータから、第2報<sup>2)</sup>では模擬授業後の授業評価シートのデータを解析し、学生のリーダーシップ能力養成に与える影響の検討と授業運営の課題や改善点の抽出を行ってきた。第3報となる本研究では、開講初年度にMSを受講したのち、4年次に教育実習に参加した学生へのインタビュー調査を行い、学生の主観的な視点を加えたリーダーシップ能力養成の実証的検証と授業運営の課題や改善点を抽出することをねらいとする。

### 2. 「マルチスポーツ」科目の概要と特徴

MSの最大の特徴は、受講生が実際に指導者（教師役）として、生徒役となる他の学生を対象にスポーツの指導を行うことにある。本プログラムでは、最初のステップとしてプログラムの目的や内容などについて説明した後、受講生には担当教員が行う模擬授業を体験してもらう。その中では、担当教員は授業を行う際に必要となる指導案の書き方や指導の際に注意すべき事柄について説明をしていく。そして、学生自身が指導の実践を行う順番や指導種目などを決定する作業を行い、次回以降の指導実践に向けた準備をする。その後は各授業回において、2～3名のグループごとに指導実践（模擬授業）を展開していく。指導実践の終了後には、授業前準備、授業内容、安全管理などの観点から指導実践に対する評価を相互に行い、振り返りのディスカッションを行う。この評価の分析やディスカッションを行うことにより、学習者は

<sup>1</sup> 東邦大学理学部教養科スポーツ・健康科学教室

<sup>2</sup> 東邦大学理学部教養科教育学教室

様々な観点からのフィードバック情報を得る（図1）。

教育の現場において、それがいかなる科目であれ、教員が生徒に対して基礎的・基本的な知識・技能を伝える作業には共通性があると思われる。例えば、どの科目においても明瞭な説明や話し方などの工夫をすることは、よい授業を展開するために重要な鍵となる。また、安全管理の面に関しては、理科の授業を行う際に実験器具の取り扱いや化学薬品等の使用には十分な注意と配慮が必要となる。それは、スポーツにおいても同様で、ケガや事故を未然に防ぐという意味で、使用する用具の取り扱いや場の設定は重要な要因である。さらに、刻一刻と状況が変化するスポーツの中で、身体運動が表現する生徒個々のその人らしさを捉え、状況に合わせた指導を行っていくことは、彼らに対する共感的な態度を養い、教員としてのリーダーシップ能力を涵養することにつながると考えられる。受講生は、指導の実践を通して、また、それらの実践に対する生徒役となる学生や担当教員からの評価を受け、指導の難しさと楽しさの両方を体験する。このような体験の繰り返しが学習者自身の教師としてのリーダーシップ能力を高めることに繋がることが期待される。そして、受講生にとっては将来の自身の教師像をイメージすることが出来るようになると考えられる。

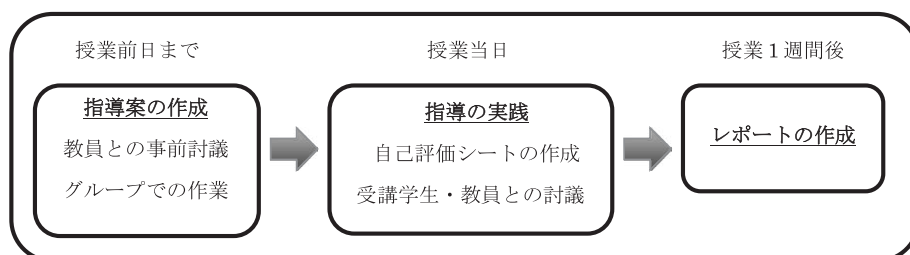


図1 模擬授業の流れ

### 3. インタビュー調査の概要

開講初年度である2014年度にMSを受講した学生19名のうち、2017年度に教育実習を経験した学生は7名であった。そのうち5名が個別のインタビュー調査に参加した。参加学生には事前に個人情報などの倫理的配慮とデータの取り扱いに関するインフォームドコンセントを行い、承諾を得てから調査を行った。インタビュー調査は2名の教員によって約45分間行われ、インタビュー内容はICレコーダーに録音された。

調査は半構造化インタビュー<sup>3)</sup>の形式を取りながら行われ、①MSを履修した理由、②MSで印象に残っていること、③MSで学んだことが活かされた場面、④あなたが考えるリーダーシップとは、⑤教育実習の中でリーダーシップが発揮された場面、⑥学生生活の中でリーダーシップが発揮された場面、⑦MSの改善点、の7つのテーマとした。

### 4. インタビュー調査の結果

インタビューによって得られたデータは逐語化され、2名の教員によってメインカテゴリーとサブカテゴリーに分類された（表1）。また、メインカテゴリーに分類された項目に対して、

教員側の課題を検討したものを表2に示した.

表1 インタビューデータのカテゴリズ

メイン・カテゴリー	サブ・カテゴリー	学生の言葉 (一部抜粋)
1. MS履修の動機、理由	①様々なスポーツを経験出来る ②教職向けの科目なので履修	色々なスポーツを体験したかった 教員向けの科目だったから履修した
2. MSを受けた印象 (全体)	①模擬授業の経験が新鮮 ②履修へのとまどいと不安 ③教職の仲間と知り合えて良かった ④グループディスカッションや仲間との指導案づくりが良い経験	模擬授業の経験がなく、こういうものだと感じながらやった 体育が苦手、何をしたいのかわからなかった 教職の仲間や先輩と仲良くなれたのは良かった 他の学科の人や同じ教職の仲間と一緒に指導案を作ったことが良かった
3. 人の前に立つ経験	①はじめての経験でとまどい、緊張した	教える経験はなかったから前に立った時は緊張した
4. これまで経験したことのない種目を教えた経験	①慣れないスポーツは教えるに自信がない	得意でないスポーツを教えるのは難しい
5. 授業の大変さの乗り越え方	①仲間と助けあって乗り切る ②生徒 (役) を授業に巻き込む	一緒に仲間で助け合ってなんとかした 生徒と一緒に授業を創っていくことを学んだ
6. 指導案を書いた経験	①高校での経験を活用 ②指導案の出来具合 ③作成自体が大変 ④授業展開が考えられない ⑤指導案どおりに進められない	高校の体育でのアクティブラーニングを思い出した 自分らしいという感じではない、教科書的な感じ どんな練習方法があるのかを調べるのも大変だった 授業の区切りや時間の見積もりなど実際には上手くいかない 指導案通りに進めることが大変だった
7. 他の人の授業を見る経験	①自分の教え方、考え方への気づき	他の人の教え方を早めから観れたのは良かった
8. 仲間からもらうフィードバックが甘い	①他者と自分との評価への戸惑い	他の人からのフィードバックは基本的に良いことしかない
9. グループでの話し合いの持ち方	①異なる学科間での話し合いが困難 ②3人1組で授業を考えることの良さ	メンバーとの打ち合わせが難しい 1年生でやる分には複数人のほうが気楽にできる
10. 教育実習に活かしたこと	①人前に立って、指示、説明した経験 ②1年次に指導案を作った経験が活かした	人前に立ってやるという練習には絶対になった 1年生の時から一人で指導案を作る練習にはなった

11. 教育実習で活きたかったこと	<p>① 1年次の経験を忘れる</p> <p>② 授業の準備に追われてしまい手が回らない</p>	<p>1年次のことなので、大変だったという気持ちが残るだけ</p> <p>授業準備をすることであっふあっふになってしまった</p>
12. MSの役立ち感(全体)	<p>① 指導案づくりの経験が役立つ</p> <p>② フィードバックを受けた経験</p> <p>③ 3年次の模擬授業に役だった</p> <p>④ 仲間と協同して問題解決すること、グループディスカッション、指導案づくりが良い。</p> <p>⑤ MSで学んだ授業の構造的理解が教科指導にも活かされた</p> <p>⑥ 教職の仲間づくりに役立った</p> <p>⑦ 危険予測の力が身についた</p> <p>⑧ リーダーシップを身に付けるのに役立つ</p> <p>⑨ 他者評価、自己評価を経験出来た</p> <p>⑩ その他</p>	<p>授業をすり合わせていく時に他の人の意見や考えを知れた</p> <p>恥になるかもしれないけど、1回失敗した経験は大事</p> <p>MSをやっていなかったら、模擬授業であっふあっふになっていた</p> <p>みんなで協力して一緒に作ったりする授業としてはMSはすごくいい授業だなあと思う</p> <p>初めて指導案的なものを作ったので、こうすればいいんだなあというイメージはつけた</p> <p>MSを機会にして、同じ教職の仲間づくりに良かった</p> <p>実験をするときの危険予測はより早く考えられた</p> <p>MSでリーダーシップとか指示とかは出せるようになると思う。就職にも役立つのではないかな</p> <p>配慮不足に気づけ、他者評価と自己評価を経験できたのは良かった</p> <p>正直あまりよく覚えていない</p>
13. MSの改善点	<p>① 指導案の作成方法を教える</p> <p>② 指導案づくりに時間をかける</p> <p>③ 履修する時期を変える(3年次に変更する)</p> <p>④ 模擬授業をやり始めた頃が効果的</p> <p>⑤ 準備時間が短いので、余裕が欲しい</p> <p>⑥ 異なる学科間での話し合いが困難</p> <p>⑦ グループ編成の仕方に工夫が欲しい</p> <p>⑧ リーダーシップの定義が曖昧</p> <p>⑨ 指導案の例示などを行う</p> <p>⑩ 段取り力を身に付けられるきめ細やかな指導が欲しい</p>	<p>指導案の作り方をしっかり教える</p> <p>授業自体で指導案を作る時間があってもよい</p> <p>模擬授業をやり始めた頃にやった方が、いろいろなことを考えるのではないかな</p> <p>少しひねった工夫をする人が増えるかもしれない</p> <p>短い期間で授業をやるのは難しい</p> <p>学科が違くと学生間での打ち合わせや日程を合わせる時間がない</p> <p>バラバラで知らない人や学年別にしてもよかったのではないかな</p> <p>個々のリーダーシップのイメージがバラバラなのではないかな</p> <p>指導案の流れの例とか他の生徒の作ったやつとかの話</p> <p>指導案を見せるなど、きめ細やかな指導が必要ではないかな</p>

	①経験者が教える時間が欲しい	経験者が教える時間があるといい
	②練習方法等を話し合う時間が必要	練習方法やアドバイスなどを話し合う時間があると良かった
	③実践後のディスカッションを多くしたい	実践が終わってからの振り返りやフィードバックが大事
	④ガイダンスの仕方を工夫する	MSの中身については聞いていなかった
	⑤評価の仕方を工夫する	1回目と2回目の比較で、プラスのところを見れるようにしておく
	⑥履修時のハードルを下げる工夫	授業の展開のところで、何か楽しめるものがあるとよい
14. 学生達の考えるリーダーシップ	①引っ張るリーダーシップからの変化	方針を決めて、こうするよと決めて、みんなが付いてくれるような指示をしてあげないと駄目
15. 高校までの経験	①クラブ、ボランティアの経験 ②人に教える経験はない	生徒会選挙、児童館でのボランティア活動、キャンプ活動での司会 発表したことはあっても、教えることがなかった
16. 大学生活の中でリーダーシップが発揮される場面の有無	①クラブ・サークルでも活動 ②教職での模擬授業場面には活かした ③専門学科の授業では発揮する場面がない ④ボランティアでの経験に活かす	サークルでも前に立っていたわけではない 教職の授業（模擬授業）以外では思い当たらない 他と協力して何かをするようなものは余りなく、協力というよりも頼るくらい 大学生活の中で自主性や発信する機会が少なかったと思う

表 2 インタビューデータのメインカテゴリーと教員側の課題

学生側のメインカテゴリー	教員側の課題
1. MS 履修の動機、理由	動機は様々
2. MS を受けた印象（全体）	1年生の段階で模擬授業を経験することが重要 受講時の不安への対処を工夫する グループディスカッション、指導案を協同して作成する経験が重要
3. 人の前に立つ経験	高校までの段階で人前に立つ経験が少ない 人前に立って声を出す経験も重要
4. これまで経験したことのない種目を教えた経験	慣れないスポーツへの苦手意識があり、丁寧な指導が必要
5. 授業の大変さの乗り越え方	仲間と乗り切る

6. 指導案を書いた経験	指導案を書いた経験がなく、それ自体が大変 ⇒後にはそれが役立つ（3年次模擬授業、教育実習など）
7. 他の人の授業を見る経験	早い時期に他の人の教え方を知ることの良さ
8. 仲間からもらうフィードバックが甘い	相互評価の際のフィードバックが機能しているのか？
9. グループでの話し合いの持ち方	グループ編成が重要 本人への負担など
10. 教育実習に活かしたこと	人前に立って指導した経験、学習指導案を作成した経験が役立つ
11. 教育実習で活きなかったこと	1年次の経験が必ずしも活かしていない学生もいる 授業（教科教育）の準備に手間取り、授業場面以外でリーダーシップを発揮する余裕を失う
12. MSの役立ち感（全体）	MSの授業の仕組みが評価されている
13. MSの改善点	指導案の作成に関するガイドの在り方の工夫が必要 履修時期（学年）の再考 準備時間不足の指摘 グループ編成に工夫が必要 リーダーシップの定義が曖昧 経験者が教えたり、練習方法を教えたりする時間が不足
14. 学生達の考えるリーダーシップ	MSを含めた様々な体験を経て、リーダーシップ観が変化する
15. 高校までの経験	これまで教えた経験はなかった
16. 大学生活の中でリーダーシップが発揮される場面の有無	必ずしもクラブやサークルでリーダーシップを発揮していない 専門学科の授業などでの発揮の機会が少ない 教職の模擬授業で人に教えるという経験を多く積む

## 5. インタビュー調査からみえてきたこと

メインカテゴリー（以下、MC）1のMSの履修動機・理由では、毎年度初頭に行われる教員養成課程ガイダンスにおける案内が履修動機になっている事がうかがえた。入学直後の1年生にとっては科目の内容を十分に理解せずに受講していた可能性が考えられる。教員側としては、これまで以上にシラバスを含めた情報公開の方法や内容をわかりやすくしておく必要性が感じられた。

MC2, 3, 4, 5では、まず全体の印象として、模擬授業体験の不安や新鮮さなどを感じていたとあり、複数名でのグループ活動（指導案作りやグループ討議）が重要な役割を果たしていた様子がうかがえた。その学期の受講人数によっては個人で全ての準備を行うことがあり、その場合は、学生を孤立させないような授業展開の工夫が必要と考えられた。また、学生が人前に立つことや、（スポーツという専門外の内容ではあるものの）指導することの難しさに直面

し苦悩する様子がかがえるが、その体験こそが授業の本質であり、リーダーシップ養成の第一歩でもあると考えられる。筆者らはMSにおける学生の葛藤・苦悩体験（失敗体験）はその後の成功体験への糧になり得ると考えている。とはいえ、1年生での受講ともなれば模擬授業に大きな重圧を感じる学生もいることを想定すると、模擬授業の成立には、受講生役の学生と見守る教員の温かく寛容な態度も重要になるだろう。

MC6の指導案の作成に関しては、MSの指導案の作成が初めての経験であり、大変であったという印象が学生から語られた。しかし、教員養成課程の授業においても2年次後半から指導案作成をすることになり、その後に役立っていることも語られている。MSで指導案を完璧に仕上げる必要性はないが、授業準備から授業の構成・展開を考案していく作業は、教員養成課程の学生には良い経験となっているように感じられた。ただし、MC9やMC13において、学科学年が異なるグループ編成となった場合に、指導案等の打ち合わせの時間が取りにくいことや指導案作りの時間を別途に設ける提案もあり、MSの初回からの授業展開の工夫を検討していく必要性が感じられた。そのため、1年生の履修学生に対しては作成の手引きや教員との事前相談などをより丁寧に行うことなどが対処法となるだろう。中には、高校の体育においてアクティブラーニング形式の授業を体験していたため、その経験が生きたという学生もいた。今後は高校までの教育課程でアクティブラーニングの機会の増加が想定されることから、高校までの学びとの接続も視野に入れていく必要があるかもしれない。

MC7, 8では、他の学生の授業を受講生として受ける経験は、自分自身の指導方法や考え方向き合う機会となった様子がかがえた。しかし、授業後のフィードバックに関しては、評価の内容に満足していないという意見もあり、第2報で検討した教員評価と学生評価の相違について、受講した学生からも同様の見解がみられた。この点は学生と教員の評価シートを別項目にするなどの改訂を検討していくことが考えられる。

MC10, 11では、教育実習の実際の場面でのMSの経験の活用について、指導案作成の経験や人前で指導する経験が生きたという報告と、教育実習の指導案作成で手一杯だったという報告の両方がみられた。それには、MSが1年春学期の履修であるため忘れてしまっているという背景も加味する必要があるだろう。MSが教育実習場面には肯定的な影響を与えたとみられるものの、リーダーシップの発揮・養成という観点ではMSのような単発の授業だけでは十分ではないとも考えられた。

MC12ではMSの全体を通して役に立ったこととして、「指導案作成」、「自己と他者のフィードバック」、「仲間との協働作業」、「危険予測」「リーダーシップ」という言葉が語られ、MSの授業の仕組みやねらいが、学生に一定の評価をされていると考えられる。しかし、MC13のMSの改善点についても多くの提案がみられた。「指導案の作成方法」、「開講時期・学年」、「準備時間不足の改善」、「グループ編成の工夫」、「リーダーシップの定義の不透明さ」、「評価方法の再考」など、第1, 2報では見えてこなかった検討課題も提起された。

MC14, 15, 16から、リーダーシップ体験について、学生達は在学中にあまり多くの体験をしていないことがうかがえた。学生達は様々な経験を通して、自身のリーダーシップ像を見出していくことになるはずであり、学生生活や授業におけるリーダーシップ発揮の場面が少ないことは残念に感じられる。学生のリーダーシップの概念については統一したものはないものの、『グループの意見を聞くこと』『独りよがりにならないこと』といった反応から、“引っ張る”タイプのリーダーではなく“まとめていく”タイプのリーダー像を描いている様子がか

がえる。リーダーシップには様々な定義が存在し、第1報では小野<sup>4)</sup>の「他者達（フォロワー）に（組織や集団にとって）何が必要なのか、どのようにしてそれを効率的に遂行するかについての理解と合意を得るために影響を及ぼす過程であり、共有された目的を達成するために個人を動かし、彼らの努力を結集する過程である」を参照している。他にも、ロナルド・A・ハイフェッツら<sup>5)</sup>はアダプティブ（適応）・リーダーシップを提唱し、「難題に取り組み、成功するように人々をまとめあげ動かしていくこと」と定義して、成功の概念を進化生物学における繁栄と同義としている。スーザン・R・コミベズら<sup>6)</sup>は関係性リーダーシップを提唱し、「ポジティブな変化をもたらす、人々の関係的で倫理的なプロセス」と定義している。また、元ラグビー日本代表監督のエディー・ジョーンズは「周りの人間に責任を持たせ、その結果、最大限のものを引き出すのが本物のリーダー」<sup>7)</sup>とインタビューで語っている。学生からは生徒や集団のことを優先する考え方が語られ、上記の解釈から逸脱している様子は見られない。しかし、MSにおいて期待されるリーダーシップ像の提示について、教員側も吟味していく必要性を感じさせられた。また、第1, 2報でも考察してきたところであるが、教養科カリキュラムや教員養成課程カリキュラム、さらには専門学科での学びを含めたカリキュラム全体を通して、リーダーシップ養成の在り方について検討を重ねていく必要があると改めて感じられた。

## 6. まとめにかえて

第1, 2報ならびに本研究のインタビュー調査によって、MSによるリーダーシップ能力の養成に関する全体像が浮かび上がってきた（図2）。1年次にMSを受講していても、2年次には、リーダーシップ能力養成のカリキュラムが欠けていることなど、MSを受講した後には隙間があり、継続的なカリキュラムとなっていないことが推測された。この点は、第1, 2報でも論じているように、他の教養科カリキュラムや教員養成課程カリキュラムにおいて、リーダーシップ能力を養成するような科目を強化することや、科目間の連動性や連携性を高めたスパイラル構造のカリキュラム構成を構築していくことが重要になるだろう。

学生のリーダーシップ能力は東邦大学理学部のディプロマポリシー<sup>8)</sup>の一つである、【他者と協力して課題を解決する力を持つ】に含まれており、学部全体としてその能力を養成していくことが強く求められている。しかしながら、現在の理学部のカリキュラムの中にリーダーシップを標榜した科目は少ない。故に、専門学科におけるリーダーシップ能力養成関連科目との連携、リーダーシップ能力に特化したプログラムの開発に向けたキャリアセンターや教育開発センターとの連携、学生の主体的な活動であるクラブ活動の拡充など、幅広い見地からの取り組みが期待される。

本研究は少数の学生へのインタビューに留まっており十分な検討が出来たとは言い難い。今後もMSを受講した学生へのインタビュー調査を継続しつつ、東邦大学理学部のリーダーシップ能力の涵養に関する検討を進めていきたい。



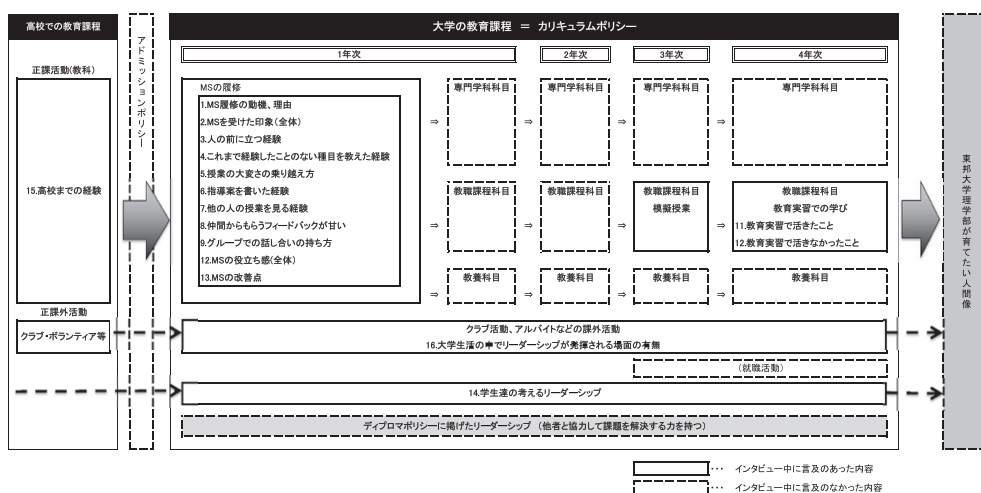


図 2 マルチスポーツを受講した学生たちの学びの全体像

### 引用文献

- 1) 新保幸洋, 湯田秀行, 澁川賢一 「スポーツ健康科学教室との連携による教員養成課程理趣学生のリーダーシップ養成の試み」 東邦大学教養紀要, 47, p69-93, 2016.
- 2) 澁川賢一, 新保幸洋, 湯田秀行 「スポーツ健康科学教室との連携による教員養成課程履修学生のリーダーシップ養成の試み (2)」 東邦大学教養紀要, 48, p103-110, 2017.
- 3) 川島大輔 「インタビューの概念」 やまだようこ, 麻生 武, サトウタツヤ, 能智正博, 秋田喜代美, 矢守克也【編】, 質的心理学ハンドブック, 新曜社, p294-306, 2013.
- 4) 小野善正 「まとめ役になれる! リーダーシップ入門講座」 中央経済社, p18.
- 5) ロナルド・A・ハイフェッツ, マーティ・リンスキー, アレクサンダー・グラショウ, 水上雅人【訳】 「最難関のリーダーシップ 変革をやり遂げる意志とスキル」, 英治出版, p41, 2017.
- 6) スーザン・R・コミベズ, ナンス・ルーカス, ティモシー・R・マクマホン, 日向野幹也【監訳】 「リーダーシップの探求 変化をもたらす理論と実践」 早稲田大学出版部, p57, 2017.
- 7) 生島 淳 「エディー・ジョーンズとの対話 コーチングとは「信じること」」 文藝春秋, p136, 2015.
- 8) 東邦大学理学部ディプロマポリシー, [http://www.toho-u.ac.jp/sci/course/diploma\\_policy.html](http://www.toho-u.ac.jp/sci/course/diploma_policy.html) (平成 30 年 1 月 5 日確認)